

編集後記

二号の編集がやつと終つて、本印刷に廻されておつた去る7月27日、久松先生と小生とで、GHQのJohnson大佐を訪れた。創刊号が出来次第早々お見せして喜んで頂きたいと思つておつたが、いざとなると仲々氣が引けて一日一日と延びてしまつたが遂に決心して参上したものである。おそろおそろ苦心の創刊号を大佐の机上に呈出すると先ず大佐は注意深く興味を持つて眺められたが、最初「大變きれいな雑誌である。」と申され、次いで内容の題目の説明を求められた。心配しいいページをめくりながら表題と筆者の名前を申上げて行くと、一つ一つうなづかれておられたが、最後に「大變よい構想である。」とほめられた。「早速 America の関係方面に紹介したい。大いに今後努力するように。」といわれた。大佐のもとを辞して司令部から出ると、ホツトした。早速前の丸ビルの地下室の食堂へ飛込んで、久松先生と二人で大祝宴を開いて前途を祝し合つた。この雑誌も愈々國際場裡に出ることになった。独りよがりではない。本当のものと取組まねばならぬと思うと緊張させられる。然し良いものを作るには矢張りこの眞剣さが必要であろう。読者の皆様と一緒に勉強させて頂く。

諸愈々三号を世の中へ送り出すことが出来た。赤坊も三つにでもなれば、一人歩きをする。「病院」もそろそろ雑誌らしい体裁が整つて來なければならぬ筈である。然し内容は先生方の御熱筆で光彩陸離たるものであるが、編集の未熟が目立つ。御許しを乞う。

小沢國立病院課長は、近代社会の病院の本質を明確にされた。日本の病院もこの進路に向つて出発しなければならぬ。尾村國立療養所課長は、多年の療養所経営の御経験から日本の病院管理の当面する問題の急所に實際的なメスを加えられた。島内研修所員の世界の病院管理学校と日本のそ

れの新発足の状態との比較は、この方面の研究に欠けておつたわれわれに大きな示唆を與えるものであろう。英國は勿論、最近では Swedenn にも出來た様である。聖ロカ初代病院長のトイスラー先生の追悼会が催されたが、橋本院長の御挨拶の記事は、トイスラー先生の偉大な足跡に対して、改めて敬虔な追悼にふけらせられる。春木先生は、多年の結核治療の御研究と御活動に加えて、更に結核療養所の管理の問題にまで研究を進められ、結核療養所の新しい管理の知識を御教え下さることは感謝に堪えない。この御原稿は、一般病院の管理にも大變参考になることと思う。守屋先生は此号では、病院の顔ともいわれる受付の問題を、理想と現實に分けて、具体的な説明をされた。來月も亦此様な實際的な御研究をのせて頂く御約束であるから、御期待願ひ度い。千種先生は医療の社会化について本号においても警鐘を打たれておられる。医人と云われる人々は大いに傾聴すべき事と思う。長井先生の病院給食の改善の御原稿は、病院として、最も苦心を要する処であつて、先生の御苦心からいろいろのことを汲取ることが出来ると思う。久松先生の夢や何時の日か實現し度い。瀬木先生の病院統計の解説は今後共われわれの勉強の資料として毎号御願ひ致し度い。吉田は組織の問題に手を触れ始めて見た。大方の御叱正を仰ぎたい。最後に病院の格付けの問題であるが、愈々医療法に基いて病院の質の向上が要求される様になつた。このことは当然日本の經濟と平行して考えねばならぬ問題であるが、然し何れにしろ、その意圖するところは民衆に対して正しい奉仕をする病院に改善して行くことにあるので、この点各病院と医療監視員とが協力して、素直に正しい道を一步一步でも進むような処理が必要ではないかと思う。來月号からは質疑應答欄を設けそれぞれ専門家に御答をして頂く積りであるから、どしどし御問合せ願ひ度い。

(吉田幸雄)